

NEW JAPAN
PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2026/2027シーズン



2026/2027 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 9月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #42 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #672 石川亮子	7
楽員ストーリーズ ⑤7 城 満太郎 (コントラバス)	13
NJP from Inside	14
2026 / 2027 シーズン 定期演奏会プログラム	20
NJP 10月、11月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	22
お客様からの声	25
室内楽シリーズ	28
音のアトリエ	29
フィリピン公演ご報告	32
「パトロネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

〈コンサートの感想をお寄せください〉

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。



9.11 [金] 12 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第42回

2026年9月11日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール

9月12日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

〈フランス〉

●ラヴェル (1875-1937)
Maurice Ravel

組曲「マ・メール・ロワ」
“Ma mère l'Oye” Suite

約20分

- | | |
|-------------------|--|
| I. 眠れる森の美女のバヴァーヌ | Pavane de la Belle au bois dormant |
| II. 親指小僧 | Petit Poucet |
| III. バゴダの女王レドロネット | Laideronnette, Impératrice des Pagodes |
| IV. 美女と野獣の対話 | Les entretiens de la Belle et de la Bête |
| V. 妖精の園 | Le jardin féerique |

クーブランの墓 (管弦楽版)

約15分

Le Tombeau de Couperin (orchestral suite)

- | | |
|------------|----------|
| I. プレリュード | Prélude |
| II. フォルラーヌ | Forlane |
| III. メヌエット | Menuet |
| IV. リゴードン | Rigaudon |

—— 休憩20分 ——

左手のためのピアノ協奏曲 ニ長調 *

約20分

Le Concerto pour la main gauche en ré majeur *

『ダフニスとクロエ』第2組曲

約30分

“Daphnis et Chloé” Suite No. 2

- | | |
|------------|----------------|
| I. 夜明け | Lever du jour |
| II. パントマイム | Pantomime |
| III. 全員の踊り | Danse générale |

[指揮] 沼尻竜典
Ryusuke Numajiri, Conductor

[ピアノ] 久末 航 *
Wataru Hisasue, Piano *

[コンサートマスター] 西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団)
■特別協賛：オリックス株式会社 / 公益財団法人オリックス宮内財団
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会
■後援：在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランス

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



AMBAassade
DE FRANCE
AU JAPON
Liberté
Égalité
Fraternité

INSTITUT
FRANÇAIS
フランス・インスティテュート・フランセ

Profile



©Ayane Shindo

沼尻竜典 [指揮] Ryusuke Numajiri, Conductor

神奈川フィル音楽監督、トウキョウ・ミタカ・フィル音楽監督。ベルリン留学中の1990年、ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。以後、ロンドン響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ベルリン・コンツェルトハウス管、フランス放送フィル、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、シドニー響、チャイナ・フィルなど、世界各国のオーケストラに客演を重ねる。国内外で数々のポストを歴任。ドイツではリュベック歌劇場音楽総監督を務め、オペラ公演、劇場専属のリュベック・フィルとのコンサートの双方において多くの名演を残した。ケルン、ミュンヘン、ベルリン、バーゼル、シドニーなどの歌劇場へも客演。16年間にわたって芸術監督を務めたびわ湖ホールでは、ミヒャエル・ハンペの新演出による『ニーベルングの指環』を含め、ワーグナー作曲の主要10作品をすべて指揮。14年には横浜みなとみらいホールの委嘱でオペラ『竹取物語』を作曲・初演、国内外で再演されている。17年紫綬褒章受章。



©Yuji Ueno

久末 航 [ピアノ] Wataru Hisasue, Piano

2025年、世界三大コンクールのひとつ、エリザベート王妃国際音楽コンクールで日本人史上最高位の第2位受賞。国際的に大きな話題を集めた。17年にはミュンヘン国際音楽コンクールで第3位および委嘱作品特別賞を受賞。その他、第7回リヨン国際ピアノコンクール第1位および聴衆賞、青山音楽賞新人賞、青山音楽賞バロックザール賞、青山音楽賞青山賞受賞。24年、第16回ゲザ・アンダ国際ピアノコンクールにて、審査員によって授与される2つの特別賞（ベートーヴェン賞およびリスト・バルトーク賞）受賞。バイエルン放送交響楽団、ブリュッセル・フィルハーモニー管弦楽団、アントワープ交響楽団、ベルギー国立管弦楽団、東京都交響楽団などと共演。25年、ドイツのレーベル GENUIN classicsからデュサパン作品集『Did it again』をリリース、26年には、25年12月にサントリーホールにて開催された凱旋リサイタルを収録したCDをリリース。第36回日本製鉄音楽賞、第35回出光音楽賞受賞。ベルリン在住。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

1904年6月16日、裕福な音楽愛好家シパ・ゴデブスキと初めて出会ったモーリス・ラヴェル(1875~1937)はすぐに意気投合。ゴデブスキの家や別荘は、ラヴェルたちが結成していた芸術サークル「アパッシュ(ならず者の意)」の仲間たちが出入りするサロンにもなっていく。

ところがパーティーの最中であっても、ラヴェルは子供部屋でゴデブスキ家の第一子マリー(愛称ミミ)、第二子ジャンと遊ぶことを好んでいた。後年、ミミは「両親の友人のなかでもラヴェルが一番好きだった」「私の子供時代の思い出で、ラヴェルが登場しないものはほとんどない」と振り返っているほどなのだ。ラヴェルは無類の子ども好きで、子どもという題材は彼の創作をたびたび刺激したのである。

■ ラヴェル：組曲「マ・メール・ロワ」

1908年の夏から初秋にかけて、ラヴェルはゴデブスキ家の別荘に滞在。夫妻が外出する9月のある数日間、家庭教師と共に子守りを引き受けた。その間に「美女と野獣」や「レドロネット」、あるいは自作の童話を語ることを「日課」とし、その流れから9月20日に「ミミとジャン・ゴデブスキのためのパヴァーヌ」というピアノ連弾曲が書かれた。ラヴェルは「子どもの詩情を呼び起こそうという狙いが、自然に自分の作風を簡素化し、書法をそぎ落とすことへと導いた」と振り返っている。

原曲は子どもたちに
捧げた連弾曲

完成の経緯 ▶

それから3週間後に父ジョゼフが亡くなると、ラヴェルの創作は1年半近くも停滞してしまう。出版社デュランは、前述した「パヴァーヌ」を組曲にするアイデアを提案。ラヴェルは1910年3~4月に残り4曲を書き足した。本日演奏されるのは、1912年のバレエ化で新曲を書き足す前に、まずピアノ連弾版をそのまま編曲した管弦楽版だ。

5曲から成る組曲 ▶

仏語で「マザー・グース」を意味する「マ・メール・ロワ」は、おとぎ話の世界を連想させるタイトルとして選ばれた。魔法の眠りについた王女を、善い妖精が見守る「眠れる森の美女のパヴァーヌ」で始まり、帰りの道を見失ってしまった「親指小僧」、中国の首振り人形が音楽を奏でる「パゴダの女王レドロネット」、ワルツで愛を育んで最後は野獣の魔法が解けて王子になる「美女と野獣の対話」、子どもの純粋さを讃える「妖精の園」で締めくくられる。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン2、ティンパニ、大太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、タムタム、シロフォン、ハープ、チェレスタ、ジュドゥタンブル、弦楽5部。

■ ラヴェル：「クーブランの墓」(管弦楽版)

失意のなかで ▶ 1914年7月28日に第一次世界大戦が勃発した時、ラヴェルはピアノ三重奏曲を書いていた。8月末に三重奏曲を完成させると従軍志願したが、体重が基準に満たず不合格となってしまう。それでも諦めずに運転教習を受け、翌年3月には補助兵役に合格している。1916年9月に赤痢と思しき症状があらわれ、1917年6月には軍務から離れることに。しかも1917年1月5日には最愛の母マリーが死去。ラヴェルの身体と精神はボロボロになった。

戦死した仲間たちに ▶ こうした最中に「クーブランの墓」は作曲された。フランソワ・クーブラン(1668~1733)が作曲した「王宮のコンセール第4番」(1722年出版)の「フォルラーヌ」を、ラヴェルは1914年4月頃にピアノ用に編曲。そうした経験をもとにして三重奏曲完成前の1914年7月に作曲を開始し、従軍中は作曲が中断するも、1917年11月に全6曲を完成させた。各曲は第一次世界大戦で亡くなった仲間たちに捧げられている。1919年4月11日にマルグリット・ロンによって初演された後、同年6月にラヴェルは4曲を抜粋して並べ替えた管弦楽版を編曲した。

4曲から成る管弦楽版 ▶ チェンバロ風の装飾音が印象的な「プレリュード」、クーブランをモデルにしたつもモダンな不協和音を取り入れた「フォルラーヌ」、実はフランス発祥の舞曲「メヌエット」、南仏発祥の舞曲「リゴードン」は新古典主義的な転調で色彩を変えていく。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、ハープ、弦楽5部。

■ ラヴェル：左手のためのピアノ協奏曲 二長調

戦禍で右手を失い ▶ 第一次世界大戦では生還できても、音楽家として致命的な怪我を負ってしまう人も少なくなかった。著名な哲学者を弟にもつパウル・ワイトゲンシュタイン(1887~1961)は将来を囑望されたピアニストであったが、26歳でデビューした翌年に従軍。戦線に加わった4日後に銃撃を受け、野戦病院で右腕を切断せざるを得なくなってしまった。

完成の経緯 ▶ 捕虜となったワイトゲンシュタインは、自らの師であるヨーゼフ・ラーボル(1842~1924)に左手だけで演奏できるピアノ協奏曲を依頼。1915年11月に釈放され、その翌年に左手のピアニストとして演奏活動をはじめた。1922年末からヒンデミットやコルンゴルトなどに、1923年末にR.シュトラウスに新作を委嘱。1929年に出会ったラヴェルに新作を依頼した結果、この協奏曲が生まれた。緩—急—緩というテンポの異なる3つの部分が切れ目

曲の構成と音楽の特徴 ▶

なく続く単一楽章で、ソナタ形式の要素も盛り込まれている。

第1部(緩) 混沌とした[序奏]のなかから、まずはコントラファゴットが“付点リズムの主題”を、次いでホルンが“ジャズの主題”を奏で、盛り上がってゆくと2つの主題が重ね合わされる。ピアノが華々しく登場すると[提示部]になり、落ち着いたところで“付点リズムの主題”が明るい雰囲気第1主題に姿を変える。管弦楽が引き継いだあと、もう一度ピアノが戻ってくると今度は抒情的な第2主題を奏でる。管弦楽によって第1主題が再び登場すると[展開部]に突入する。

第2部(急) 規則的なリズムにのって進んでゆくジャズ風のスケルツォ。形式上は[展開部]が続いており、変奏された主題が絡み合っていく。

第3部(緩) 第1主題の後半が管弦楽で高らかに鳴り響くと[再現部]に。続くピアノのカデンツァでは“ジャズの主題”、第2主題、第1主題の前半が再現されていく。管弦楽が第1主題を、ピアノが“ジャズの主題”を奏でるクライマックスを経て、スケルツォが一瞬だけ回帰する。

[楽器編成] ピアノ独奏、フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、Es管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、タンバリン、ウッドブロック、タムタム、ハープ、弦楽5部。

■ ラヴェル：『ダフニスとクロエ』第2組曲

ロシア・バレエからの委嘱 ▶

既に触れた通り、1908年10月に父を亡くして以来、ラヴェルの創作は停滞しがちだった。1909年6月にラヴェルは、パリで一世を風靡しはじめたばかりのロシア・バレエ団から1年後に初演する新作バレエを依頼される。だが5ヶ月後の11月の時点で間に合わないと判断されるほど作曲が進まず。結局は依頼から3年後の1912年6月8日に初演されている。

第2組曲の構成と特徴 ▶

バレエは全1幕で、第2組曲は最後の第3場だけを抜粋したもの。ローマ帝国時代のギリシアの作家ロンゴスによる同名小説が原作で、15歳のダフニスと13歳のクロエが恋敵の牛飼いや海賊たちの妨害を乗り越えて結ばれるという物語だ。半獣神の力で海賊から助けられたクロエがダフニスと再会を果たす「夜明け」、半獣神が彼女を助けた理由を無言劇で演じる「パントマイム」、神への信仰を誓った2人を祝うかのような「全員の踊り」で締め括られる。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、Es管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、テナードラム、シンバル、トライアングル、タンバリン、カステネット、ハープ2、チェレスタ、ジュドゥタンブル、弦楽5部。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2026-2027 Season
#672

9.25 [金]
サントリーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第672回定期演奏会
2026年9月25日(金) 19時00分
サントリーホール

9.26 [土]
トリフォニーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第672回定期演奏会
2026年9月26日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

<指揮者によるプレトーク(開演約10分前~)>

●ブルックナー (1824-96)

交響曲第5番 変ロ長調 WAB 105 (ノーヴァク版)

約80分

Anton Bruckner: Symphony No. 5 in B-flat major, WAB 105 (ed. L. Nowak)

- I. 序奏: アダージョ〜アレグロ
Introduction: Adagio - Allegro
- II. アダージョ: 非常にゆっくりと
Adagio: Sehr langsam
- III. スケルツォ: とても速く
Scherzo: Molto vivace (Schnell)
- IV. フィナーレ: アダージョ〜アレグロ・モデラート
Finale: Adagio - Allegro moderato

※本公演は休憩がありません。

あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくする。
そのころざしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

豊島美術館

鹿島特設サイト



100年をつくる会社
鹿島

[指揮] 佐渡 裕
Yutaka Sado, Conductor

[コンサートマスター] 西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

- 主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催: すみだトリフォニーホール(公益財団法人墨田区文化振興財団) [9/26公演]
- 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会
- 後援: オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム東京

アラム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



「オーストリア文化フォーラム」
austrian cultural forum

Profile



©Takashi Iijima

佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。1987年アメリカのタンゲルウッド音楽祭に参加。その後、レナード・バーンスタイン、小澤征爾に師事。89年新進指揮者の登竜門として権威あるプザンソン国際指揮者コンクールで優勝。95年レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクールで優勝し、「レナード・バーンスタイン桂冠指揮者」の称号を授与される。

これまでパリ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、ケルンWDR交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団など欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねている。

また「エクサンプロヴァンス音楽祭」の『椿姫』（パリ管弦楽団）、「オランジュ音楽祭」のブッシーニ『蝶々夫人』（スイス・ロマン管弦楽団）、トリノ王立歌劇場では『ピーター・グライムズ』、『カルメン』、『フィガロの結婚』など海外でのオペラ公演も多数指揮。2025年6月までオーストリアを代表し110年以上の歴史を持つトーンキュンストラー管弦楽団音楽監督を10年間務め、その後同楽団名誉指揮者に就任した。国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、サントリー「1万人の第九」総監督。

CDリリースは多数あり、最新盤はトーンキュンストラー管弦楽団を指揮した23枚目のCD『マーラー：交響曲第8番』を2026年5月にリリース。著書に『僕はいかにして指揮者になったのか』（新潮文庫）、『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP新書）、絵本『はじめてのオーケストラ』（小学館）などがある。出光音楽賞（1991年）、モンブラン国際文化賞（2003年）、渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2003年）、岩谷時子賞（2014年）、文部科学大臣表彰（2024年）、外務大臣表彰（2025年）などの受賞歴がある。

オフィシャルファンサイト：

<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>

Program Notes ●石川亮子 [音楽学]

そんなにワーグナーを敬愛しているのなら楽劇や交響詩を書けばよいのに——。1868年秋から始まったブルックナーのウィーン時代。そこは、エドゥアルト・ハンスリック（1825～1904）を中心とする反ワーグナー派の牙城であった。音楽評論家、さらにウィーン大学の音楽史および音楽美学の教授として絶大な影響力を誇ったハンスリックが擁護したのは、ブルックナーよりも9歳年下で、ほぼ同じ時期にウィーンに居を構えたブラームスだった。ブルックナーの交響曲第5番について、後年、ハンスリックが書いた批評には次のような文章がある。「大胆に独奏的な部分と、空虚で乾いた、また時に粗野な一節が、しばしば明確な関係性を持つことなく交代している」。「論理的な思考、洗練された美意識、物事を深く吟味し、全体を見通す芸術的理解力が感じられないのは残念である」。

4曲の交響曲を書いたブラームスに対して、「第0番」も含め第9番（未完）までの交響曲を書いたブルックナーは、ロマン派後半を代表する交響曲の作曲家であった。それにもかかわらず、交響曲第3番をワーグナーに献呈し、楽劇を思わせる壮大な構想と音響を交響曲に持ち込んだことで、ブルックナーはハンスリックから厳しい批判を受けた。それでもブルックナーは交響曲を書き続けた。それは交響曲こそが、楽劇や交響詩とは異なるかたちで、自らの世界観を表現するための場であったからであろう。ブルックナー自身は交響曲第5番を「対位法的傑作」、さらには「ファンタジー的 die Phantastische」と評していたと伝えられる。「対位法的」かつ「ファンタジー的」——。この2つの言葉を頭に置きつつ、約70～80分に及ぶ第5番という巨大な交響曲の成立経緯と構造、そしてそこに込められた豊かな発想を見ていきたい。

■ブルックナー：交響曲第5番 変ロ長調 WAB 105（ノーヴァク版）

60歳で交響曲作家の名声を▶

アントン・ブルックナー（1824～96）はオーストリア、オーバーエステライヒ州リンツ近郊の村に生まれた。その創作は19世紀ロマン派のなかで、ミサ曲などの宗教的声楽作品と交響曲を中心とするという、きわめて独自の位置を占めている。音楽教師、オルガニストとして、ザンクト・フローリアン、リンツ、ウィーンと着実にキャリアを積み上げていったブルックナーが、ついに交響曲の分野で評価を確立したのは60歳の時、第7番の初演がライブツィヒで大成功を収めた1884年のことだった。

5番作曲の経緯 ▶

交響曲第5番の創作は、ウィーン大学への求職活動を繰り返し行った時期に始まっている。第4番の初稿完成から約3ヶ月後の1875年2月、緩徐楽章から作曲に着手。それから第1楽章、スケルツォ楽章、第4楽章の順に書き進められ、翌1876年5月16日にひとまず完成をみた。同年8月、バイロイトでワーグナーの『ニーベルングの指環』4部作の初演に立ち会い、第3番の改訂などに取り組んだ後、1877年5月から第5番の見直しを開始。翌1878年1月に作業を終え、この段階でチューバが追加された。

特徴的な2つの側面 ▶

曲は1878年11月4日、オーストリア＝ハンガリー帝国で教育大臣を務めたカール・フォン・シュトレマイヤーに献呈された。ブルックナーは1876年4月から、ウィーン大学で正式に和声学と対位法の講義を始めており、「ウィーンでの安定したポスト」への感謝として、「対位法的傑作」である交響曲第5番が捧げられたのである。「対位法的」という言葉が示すように、本作の大きな聴き所のひとつは、第4楽章のソナタ形式に組み込まれた2つのフーガであろう。また「ファンタジー的」という言葉には、いわゆる空想的、自由な想像力という意味とともに、ロマン派におけるファンタジー、すなわちシューマンの「幻想曲」などにみられる、ソナタ形式を拡大し、各楽章が独立しながらも相互に関連し、ひと続きの世界を作るというアイデアも重ねて考えることができる。この「対位法的」「ファンタジー的」という2つの側面は、各楽章の構造にさまざまなかたちで現れている。

作曲家不在の初演、
後世の校訂版 ▶

しかし、この「対位法的傑作」をブルックナー自身がオーケストラで聴くことはなかった。交響曲第5番の初演は、ブルックナーの存命中の1894年にグラーツで、ブルックナーの高弟として知られるフランツ・シャルクによって行われた。当時ブルックナーは健康上の理由でそこに赴くことができず、1896年に出版された初版も、第4楽章に大幅なカットを施し、全楽章にわたってオーケストレーションやテンポに変更を加えたシャルクによるものであった。その後、ブルックナーの自筆譜など原典資料に基づいて、1935年にハース版が、さらに1951年にノーヴァク版が刊行されたが、両者の間に本質的な違いはないとされる。本日の演奏はノーヴァク版による。

曲の構成と
音楽の特徴 ▶

第1楽章は序奏付きのソナタ形式。ブルックナーの交響曲で、第1楽章に独立したアダージョ（緩）の序奏を置くのは第5番だけである。低弦のピッツィカートと弦楽器の対位法的な旋律によって印象的に始まり（モーツァルトの「レクイエム」冒頭を思わせるとも言われる）、鋭いリズムを伴って上昇する楽句と金管楽器によるコラールが続く。

アレグロ（急）の主部に入ると、提示部でヴィオラとチェロによる第1主題（レではなくレ♭が現れるため、変ロ長調とも変ロ短調とも解釈される）、ピッツィカートの弦楽器を主体とする第2主題、木管楽器が伸びやかに歌う第3主題が提示される。展開部はフルートとホルンの対話によって導かれ、序奏の音楽が回帰、さらに金管楽器によるコラールが鳴り響く。再現部では3つの主題が著しく短縮され、コーダは第1主題を執拗に繰り返しながら最後は変ロ長調で華やかに終わる。

第2楽章は緩徐楽章で、2つの主題が交互に変奏的に展開されていく。第5番で最初に書かれ、オーボエによる憂いを帯びた第1主題には、作曲当初のブルックナーの苦しい心境がにじんでいるとされる。一方、弦楽合奏による深い情緒をたたえた第2主題は、ブルックナーの交響曲のなかでもとりわけ美しく感動的な音楽として名高い。

第3楽章はスケルツォ楽章。第2楽章冒頭のピッツィカートの音型がテンポを速めて登場し、そのままスケルツォの第1主題が始まる。スケルツォ主部はソナタ形式をとり、レントラー風の第2主題は、ブルックナーの生まれ育ったオーバーエステライヒの農民舞曲を思わせる。中間のトリオものどかな雰囲気広がりが、スケルツォ主部の再現に進む。

第4楽章はベートーヴェンの「第九」のフィナーレにも通じる構成を持ち、第1楽章の序奏に続いて、第1楽章の第1主題、第2楽章の第1主題が回想されて幕を開ける。提示部に入ると、オクターヴの下降から始まる特徴的な第1主題が低弦、ヴィオラ、第2ヴァイオリン、第1ヴァイオリンへと受け渡されてフーガを形成する。続く第2主題は、第3楽章のレントラー風の主題を想起させるもの。夢見るような旋律のエピソードを挟んで、第1主題と同じオクターヴ下降から始まる第3主題が力強く提示される。そして、まさに提示部が終わろうとするところで金管楽器による厳かなコラールが鳴り響く。

展開部では、まずこのコラールを主題とするフーガが展開され、さらに第1主題が加わることで二重フーガへと発展していく（終盤にファの音のオルゲルポイントが現れて、そのまま再現部に入っていくところは圧巻のひとつである！）。再現部では、順番に主題が再現されていくが、第3主題の再現には第1楽章の第1主題が重ねられてコーダへの移行が始まる。コーダは諸主題を回想しながら、やがてスコアに「コラール、最後までfff」と記された圧倒的なクライマックスへと達し、輝かしく全曲を閉じる。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部。